

# デュラスと書かれなかった父親：

## フランス国立海外文書館での調査ノート

河野美奈子

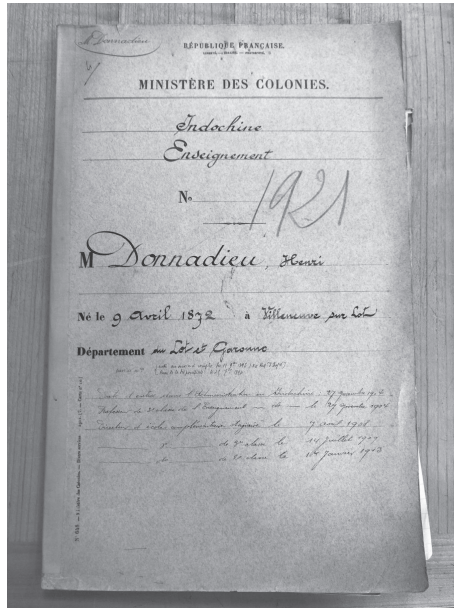
はじめに

作家マルグリット・デュラス (Marguerite Duras, 1914-1996) の父親であるアンリ・ドナデュー (Henri Donnadieu) は、デュラスの自伝的作品のなかで意図的とも思えるほど描かれてこなかった。その理由として、デュラスの幼い時に父親が、インドシナから遠く離れた祖国フランスで亡くなってしまったため、父親についての記憶があまりなかったことが考えられる。父親不在の家族となったデュラス一家では母親が絶対的な存在となった。母親の存在はデュラスの自伝的作品のなかで直接描かれているのももちろんのこと、インドシナを舞台にした作品以外でも多く描かれている。強烈な存在である母親の影に隠れてしまったデュラスの父親は、長い間デュラスの自伝的作品の舞台から早々に降りた者とみなされていた。

本研究の目的は、2019年の8月にフランスのエクズ＝アン＝プロヴァンスにあるフランス国立海外文書館で行ったデュラスの両親に関する資料調査をもとに、アンリ・ドナデューのインドシナでの足跡を追うことで、父親とデュラス作品との関係を探ることである。文書館に収められている資料は名前ごとにファイルに保存されており、父親アンリの資料は、主に軍歴証明や、療養のための休暇申書、乗船証明と彼の死亡後に手続きが行われた寡婦年金に関する書類である。デュラスの両親に関する書類はジャン・ヴァリエ (Jean Vallier) がデュラスの伝記のなかで多く挙げているが<sup>1)</sup>、ヴァリエが著書のなかで載せていない資料もあり、今回の研究調査は海外文書館に残されている父親の全資料を確認できたという点においても意義のあるものであった。当然のことながら、公文書と文学作品とを結びつけることは難しい。しかし、自伝的作品のなかで植民地におけるフランス人居留区の世界を描いていたデュラスにとって、その世界で生きた両親の存在は最も近い題材となっていたと考えられる。したがって、公文書と文学作品との距離を認識しつつも、重要な主題である両親の生涯を丹念に追う

必要があるだろう。

まず、父親アンリの歴史と自伝的作品における父親についての描写を確認したい。そして亡くなったあとの死亡届や寡婦年金を申請しようとする母マリの書類から当時のデュラス一家が置かれていた状況を検討する。最後にデュラスの両親の結婚にまつわる告発状をもとに、デュラスの作品のなかで重要なテーマとなる観衆の噂と視線について考察したい。



【写真】 アンリ・ドナデューのファイルの表紙（筆者撮影）

## 1. 入植者アンリ・ドナデュー

デュラスの父アンリ・ドナデューは、1872年にフランスの南西部にあるロット＝エ＝ガロンヌ県の町ヴィルヌーヴ＝シュル＝ロットで靴職人であるジョゼフ・ドナデュー（Joseph Donnadieu）とマリ・ラスコンブ（Marie Lascombe）の3番目の子供として生まれる。1888年には初等教育資格の免状を取得し、1889年にアジャンの師範学校に入学する。1892年に師範学校を修了し、すぐに教師としてのキャリアを積み始めている。その間約1年間の兵役を経ている。1894年に教員適性証を得て、ル・マス＝ダジュネの男子校の教育研修生となった。その後インドシナへと旅立つまで、

彼は複数の学校で教師として働いている。1895年にアリス・リヴィエール (Alice Rivière) と結婚し、1899年にジャン、1904年にジャックと、2人の息子をもうけている。

アンリのインドシナへの興味をかき立てたのは彼の弟ロジェ・ドナデュー (Rogers Donnadiou) である。8歳年の離れた弟ロジェは、1895年に植民地部隊に配属され、インドシナに赴いていた。2年後に任を解かれたが、インドシナに留まり、測量士としてサイゴンの土地台帳課で働いていた。ロジェの勧めでアンリは1904年12月30日にマルセイユからサイゴンへ向けて出発する。その後家族を呼び寄せ、1905年にサイゴンの郊外、ザーディンの師範学校で教師のポストに就く。1906年にはカンボジアの小学校の校長となっている。給料も10,000フランとなり順調にキャリアを築いていた。しかし、インドシナに渡った多くのフランス人入植者が悩まされた病が、アンリと彼の家族にもつきまとうこととなる。熱帯特有の気候に体が馴染むことができず、赤痢などの感染症をわずらう人が続出し、まずロジェの妻が亡くなり、ロジェ自身も身体を壊しフランスへの帰国を余儀なくされた。そして1909年にはアンリの妻アリスが夫と子供2人を残して病に倒れ、亡くなってしまう。フランスから遠く離れたインドシナで2人の子供を抱えたアンリの苦悩は想像に難くない。彼は子供たちをフランスのアリスの両親に預けることにする。そして、1人インドシナで生活を始めるのだが、彼の独居生活は長くはなかった。アリスの死後5ヶ月後の1909年10月に彼は再婚することとなる。相手はデュラスの母親、マリ・ルグラン (Marie Legrand) である。彼女もまた同じ教員であった夫を2年前に亡くし、2人は再婚同士だった。結婚後、1910年にピエール、その1年後にポール、そして1914年にマルグリットが生まれる。

3人の子供が生まれ、これから家族としてのインドシナでの生活が始まるところだったが、アンリが病に倒れ、フランスで療養することとなる。一家は1915年5月にフランスへ戻り、父親の故郷で生活している。療養生活は数度の延長申請が認められ、1917年の5月までと2年にも及んだ。1917年の6月、一家はサイゴンに戻るが、父親がハノイの中学校の校長に任命されたため、1917年の末に家族でハノイに移り住むことになる。健康を取り戻した父親が立派な職に就いたこの頃が、デュラス一家にとって最も幸福な時代であったと考えられる。アンリは1920年にカンボジアのプノンベン の現地人学校の校長となり、家族をハノイに残したまま赴任する。しかし、この頃には彼の健康状態は深刻なものになり、1921年4

月に療養のため単身フランスへ帰国する。そして同年12月4日にロット＝エ＝ガロンヌ県のデュラス小郡プラティエでその生涯を終えることとなった。

## 2. アンリの死後、寡婦年金をめぐる公文書

デュラスの自伝的作品では、父アンリが亡くなったことで、デュラス一家は経済的に困窮する。では、実際に残された母親と子供たちの生活はどうであったのだろうか。もちろん一家の大黒柱を失ったため、経済的に苦しい状況にはあったが、デュラスの母マリ・ドナデューは教員として働いており、さらに彼女は寡婦年金を得る権利もあった。しかしマリとアンリの弟のロジェの文書を見ると、寡婦年金が支給されるためには困難が伴っていたことが読み取れる。アンリが亡くなった半年後の1922年8月に植民地省からインドシナ総督に宛てられた書類には、アンリの弟ロジェからアンリの最初の結婚で生まれた子供たちへの年金についての問い合わせがあったことが記されている<sup>2)</sup>。このことから、この時すでに年金の手続きが進んでいたことがうかがえるが、インドシナに残された家族に寡婦年金が支給されるのはまだ先のことだった。1923年2月23日にインドシナ総督府から植民地省に通達された書類には、マリが寡婦年金を受給するための必要書類が示されている<sup>3)</sup>。当時マリは家族を連れてフランスに一時帰国中だった。1923年5月にはマリによる申請が行われ、夫が亡くなって1年以上経ちようやく支給の手続きが進むことになるが、ことは順調に進まなかった。そこから3年経った1926年になっても、寡婦年金を受け取るために必要なアンリの死亡証明に不備があり、マリは寡婦年金を受け取れないでいた。1926年5月30日に植民地省に宛てたマリの手紙には一家の差し迫った状況がうかがえる。

カンボジアの学校の校長であり、優秀な教師であるアンリ・ドナデューと結婚した私は1921年9月に未亡人になりました。ドナデューは病気になり療養休暇をとってひとりフランスへ戻りました。そして8ヶ月後、ロット＝エ＝ガロンヌ県のアルマン＝デュ＝ドロプのプラティエで亡くなりました。それから私は深刻な不安に苛まれ、今度は私が病気になってしまいました。そのため寡婦年金を申請するための書類の作成が1924年になってしまいました。ポンベンの教師である私はその書類をハノイの年金地方金庫に送りましたが、送られた「ハイフォン」で紛失してしまいました。わたしはずっと後になってそのこ

とを知り、再度書類を作成しようとしたのですが、急を要する書類が1枚足りず、見つけることができませんでした。それはマジョール医師によってアジャンで交付された診断書です。

そのため植民地長官殿にその書類を送ってくれるようにパリあるいはマルセイユに命じ私を助けていただけないでしょうか。

ドナデューは17年間植民地で誠実な公務員でした。彼は植民地で発生した風土病で亡くなりました。その証拠は彼が治療に行っていたプロンピエールのフルサル医師の診断書の複製ですが、その書類では不十分であるとして受け付けられませんでした。

教育のすべてが私にのしかかってくる父親を失った3人の子供たちの名のもと、寡婦年金を受け取ることができるように植民地長官のお力添えをお願いいたします。

敬具

マリ・ドナデュー<sup>4)</sup>

手紙ではアンリの死亡時期が1921年の9月となっているが、実際には12月である。夫の亡くなった月を間違えるとは考えにくく謎を残すが、いずれにしても寡婦年金が遅れたことは、書類が足りなかっただけではなく、夫を失ったマリが失意により身体を壊し、手続きが遅れたことも理由だった。さらに手続きの場所がフランスから遠く離れたインドシナだったことも、大幅な遅れの要因だった。マリによってハノイで提出された書類がサイゴンに届く前に、経由地のハイフォンで紛失されると手紙に書かれているが、書類の再発行は本土フランスよりも大幅に時間がかかることは容易に想像できるだろう。自身の窮状を訴えるために、「17年間植民地で誠実な公務員」であった夫や、「父親を失った3人の子供たち」を持ち出して植民地長官の心情に訴えかけるような文章になっているが、客観的に見ても体調の優れないマリが厳しい環境に置かれていることを読み取ることができる。

寡婦年金受給のための必要書類の最後の1枚である診断書をめぐってジャン・ヴァリエは「不可解な死」として項目を立てている<sup>5)</sup>。ヴァリエによると、アンリはアジャンの医師以外にボルドーのジャック・カール医師の下にも治療のため訪れており、インドシナ政府はカール医師による診断書を求めていた。そこには死亡した原因となる病名が書かれていなければならなかった。しかしカール医師による診断書にはそのことが書かれて

おらず、不十分であるとみなされ、再提出が求められていた。デュラスたち子供の後見人となったロジェが新たな診断書を発行してもらうことになっていたが、結局ロジェは診断書を受け取ることができなかった。しかし、1927年の12月にマリは正式な診断書を手にするようになる。誰がその診断書を作成したのかはわからないが、12月30日に植民地省が寡婦年金を受け取るための必要な書類を受け取ったことだけは記録として残っている<sup>6)</sup>。マリが寡婦年金を受け取ることが決まった1927年は奇しくも、自伝的作品で繰り返し描かれる、マリがカンボジアのプレイノップに耕作不能地を購入した年でもある。書類の日付が年末であるため、寡婦年金支給決定が土地購入の直接的な理由とは考えにくいだが、夫が亡くなってから6年後デュラス一家はようやく経済的に余裕を持ち始めた頃だと考えることもできるだろう。

言い換えれば、それまでの6年は夫であり父であるアンリの死を発端にして、マリが病に倒れるなど家族にとっては非常に不安定な時期であった。父親が家族と離れてフランスで亡くなったことにより、家族は彼の死に立ち会えなかったこと、そして長い間寡婦年金が受給できなかったことから父親の死は家族のなかで宙吊り状態であったとみなされる。父の死がまだデュラスが幼い時期であったうえ、長年病を患い最後はひとりフランスで亡くなったため、その死が実感できなかったということも父の存在の希薄さと考えられる。自伝的作品のなかでも父親の存在の描写は少なく、存在は一見不鮮明なものであるが、それぞれの作品で父親の描かれ方は僅かな相違を見せる。

### 3. 自伝的作品における父の存在

最初の自伝的作品『太平洋の防波堤』(*Un barrage contre le Pacifique*, 1950)では、主人公シュザンヌの母が自身の夫について以下のように語っている。

彼女の夫は、現地人の学校の校長に任命されており、彼女に言わせると、子供達世話にお金がかかっても、ずいぶん裕福な暮らしをしていた。この頃の何年かが間違いなく彼女の生涯での最良の時間であった。少なくとも彼女はそう言っていた。彼女はその時のことを、遠い夢の国か島のように回想していた。  
[中略] その裕福さは次第に豪勢といってもよいほどになる傾向があった。ジョゼフとシュザンヌは、その点はいささか眉唾物だと思っていた<sup>7)</sup>。

同作がすでに示しているように、父の死は、彼が亡くなったことによる悲しみではなく、何を措いても裕福な生活の喪失を表すものであった。母親にとって夫は、学校の校長という名誉職にあり、経済的にも不自由のない、まさに植民地で思い描いた生活を叶える存在であったと考えられる。そのため、父親のもたらす裕福さは母親により美化されていくようになった。父親の死による経済的困窮はその後の母親による耕作不能地購入につながる重要な点であるため、自伝的作品では繰り返し語られるようになる。だが、『太平洋の防波堤』においても、その後続く『愛人』(L'Amant, 1984)、『北の愛人』(L'Amant de la Chine du Nord, 1991)においても、作者デュラスが投影されたと考えられる主人公にとっての父の死への思いは描かれていない。『愛人』のなかでも父親の死は描かれているが、それは常に母親の恐怖と絶望とともに描かれている。父親が治療のためにフランスへ帰ったあと、ハノイに残された家族が豪華な邸宅の前で撮った写真に写っている母親について以下のように語られている。

どれほどつよい生の幸福でさえも、ときとして、母の気持を絶望から完全に引きはなすまでにはいたらない。それほど純粋な絶望によって絶望した母親をもつという機会に、私は恵まれたのだ。[中略]この写真の場合は、たぶん母が愚行を犯した直後だった。つまり母はこの家——写真に映っている家——を買ったばかりなのだが、わたしたちにはまるで不必要な家で、おまけに買ったのが、父がすでに重病で瀕死の床にあり、あと何ヶ月もつかというときだったのである。[中略]すでに目前に迫っていた父の死だったのか、それともその日一日が死んでしまったように思えたためか？この結婚が、この夫が、この子どもたちが疑わしく思えたのか？それとも、より普遍的に、こういった所有そのものがまるごと疑わしくなったのか<sup>8)</sup>？

ハノイの豪華な邸宅は、財をなすためにインドシナへやってきた母親にとって夢の結実である。しかし、家を購入した時点で夫は死の淵にあり、邸宅の前で撮った家族写真に映った母親は絶望と無気力のなかにいた。祖国から遠く離れたインドシナで3人の子供を抱えて、おそらく遠くはない夫の死の知らせを待ちながら絶望に打ちひしがれた母親にとって、夫や子供の存在でさえも不確かなものになっていった。幼いデュラスにとっては、父親の死よりも狂気に陥っていく母親の状態のほうがトラウマとなっていたと考えられる。



遠く離れている父親は存在としては希薄だが、彼の死のイメージが前面に押し出され、その死が一家を取り巻いていた。だが父親の死は別の意味を帯びることになる。母親は夫の死を予知したことを子供たちに話す場面がある。

電報の到着よりまえ、前の晩から、父の死を知るだろう、母だけが以前にも見たことがあるという前兆、母だけが理解できる前兆、深夜にこの邸宅の北側正面の書斎、父の書斎に狂ったように迷いこんできて啼いたあの鳥のおかげで、母が自分の父の幻像、彼女自身の父の幻像に向き合ったのもおなじくそこだ、夫の死から数日後の同じく深夜のことだ。母が明かりをつける。と、いる。邸宅の大きな八角形の客間で、テーブルのそばに立っている。母をじっと見つめている。叫び声、ひとを呼ぶ声をわたしは覚えている。母は眠っていたわたしたちを起こして、話してきかせた。[中略]母は言う。怖くなかったわ。駆け寄ったら幻像は消えてしまった。ふたりとも、鳥の日付と鳥の時刻に、幻像の日付と幻像の時刻に死んだのよ。死の事柄を含めてあらゆる事柄における母の知識に、わたしたちが驚嘆するようになったのは、おそらくそれゆえである<sup>9)</sup>。

ハノイの邸宅から引越越し、一家は父親の赴任先であったカンボジアのプノンベンにいた。父親はすでにフランスへ帰国し、次に電報を受けとるとき、それは彼の死を告げる知らせとなる。突然夫の書斎に飛び込み、声を上げた鳥により、彼女は夫の死を確信した。その後、夫の死は、彼女の父親の死と重なることになる。彼らが同じ「鳥の日付と鳥の時刻に、幻像の日付と幻像の時刻に」亡くなったと子供たちに告げることで、子供たちの父親の死を単なる悲しみではなくて、幻想的な現象へと変えたのである。こうして作品のなかで父の存在は、絶望や恐怖であるだけでなく、母親に語られることによって子供たちにとっては驚嘆 (admiration) の対象となった。そのとき父の死や絶望は消え去り、物語のなかから一度も姿を表さずに退場することになる。『愛人』のなかで父親の死は、まず母親にとっての絶望であり、その絶望を目の当たりにした子供たちにとっての恐怖だった。しかし、それは常に同じ意味を保ちつづけていたのではなく、母親が夫の死を受け入れ、すでに亡くなった彼女の父親と同じ場所に夫を入れることで子供たちにとっては父親の死は驚嘆するものとして形を変えた。最後の自伝的作品『北の愛人』では、父親は母親にとって懐古的なイメージへと変化している。母親は子供たちに父親のことを次のように語って



いる。

母親。彼女はまた、インドシナというこの国が彼らの祖国、この子供たちの祖国だということを彼らに改めて言って聞かせるのだった。彼らが生まれたのがここであり、彼女が子供たちの父親と会ったのも、彼女の愛したただひとりの男に会ったのもここだということを、その男を子供たちは知らなかった、男が死んだとき彼らがまだあまりにも幼かったからだ、またその死後も、子供たちがまだ幼かったので、母親は子供たちの幼年期を暗くしてはいけないと思って、父親のことはほとんど話をしなかった。それからまた、時は流れて、子供たちに対する愛情が母親のすべてを占めてしまったということ<sup>10)</sup>。

その早い死ゆえに父親の存在が家族のなかで消えていく様が描かれている。もはや物語のなかで父親は母親のかつて「愛したただひとりの男」であり、母親のなかでも記憶の彼方にある存在であった。子供たちに至っては、幼いときに亡くなってしまったうえに、母親があえて父親の話をしなかったため、父親を思い描くことすらできなかったと考えられる。

『北の愛人』では母親によるインドシナの肯定も特徴である。フランスの植民地のフランス人であることが前2作では母親のアイデンティティの1つであったが、『北の愛人』ではインドシナを子供たちの「祖国」としている。こうした肯定的側面はインドシナだけにとどまらず、彼女の夫との結婚そのもののなかにも見られるようになる。『愛人』では夫の死を目前にして結婚の是非について悩んでいたが、本作では「愛したただひとりの男」として幸福な記憶の象徴として夫は描かれている。フランスから離れたインドシナでの結婚は2人の結束をより強固なものにしたと考えられ、『北の愛人』でのこのような幸福のなかの結婚も一側面であると考えられる。しかし、文書館に収められた1枚の告発文はアンリ・ドナデュエーとマリ・ルグランの結婚は祝福のうちになされたものではないことを我々に示している。

#### 4. 匿名の告発文

文章の存在はジャン・ヴァリエによって指摘されていたが、詳細な内容の記載はされていなかったためあらためて言及したい<sup>11)</sup>。植民地省大臣に宛てられた1914年4月21日付けの匿名の手紙には以下のように書かれていた。

なぜ悪い噂のあるアンリ・ドナデューを今もサイゴンの高等学校の長にさせているのでしょうか。その男は愛人の手に落ち、ひそかに自分の妻を死ぬがままにしました。そこには批判されるべきことがあるのです。その愛人は妊娠しており、彼の妻は亡くなる必要があったのです。そしてその愛人は妻の死後数日でドナデュー夫人となりました。それで事実が暴かれる危険性がなくなったとも言うのでしょうか<sup>12)</sup>？

この告発状とも言える文章には事実とは異なり、誇張された箇所がある。まずアンリとマリの結婚時期は、アンリの前妻アリスが亡くなった5ヶ月後の1909年10月であり、手紙にあるような「数日」の話ではない。またマリが妊娠をしていたと書いてあるが、彼らの最初の子供ピエールが生まれたのは1910年9月のため僅かながら時期がずれている。おそらくアンリとマリが背徳的な関係のもとに結ばれ、そのような2人が、とくに校長であるアンリが教育者としてふさわしくないことを告発するために誇張されて書かれたものと判断することができる。またこの手紙が書かれた時期に着目すると1914年は2人が結婚して4年が過ぎており、月日が経っても2人の早すぎた結婚がサイゴンのフランス人社会ではスキャンダルであり、噂の対象であり続けたことがうかがえる。この手紙を書いたのは誰か、アンリの出世を妬んだ者なのか、それとも亡くなった前妻アリスの友人か、それとも全く関係のない人物か、この手紙に差出人の名前が書かれていない以上それを特定することはできない。

しかし、この手紙から推測できるのは、植民地におけるフランス人社会の閉鎖性ではないだろうか。白人居留区ではスキャンダルは恰好の噂的であり、白人居留区にはびこる噂話はデュラス作品のなかでも1人の登場人物を通して繰り返し描かれている。それはフランス人居留区のアンヌ＝マリ＝ストレットルである。『愛人』ではヴィンロンの「ラ・ダーム」として、『副領事』(*Le Vice-consul*, 1966)と『インディア・ソング』(*India Song*, 1973)では架空の植民地の大使夫人としてデュラスの多くの作品に登場する。彼女は若い青年と恋に落ちたことにより、白人居留区の噂的となり、閉鎖的な社会の犠牲者として描かれている。両親のスキャンダルがのちのデュラスに影響を及ぼしたかどうかはわからない。しかしこの告発状が書かれたのはデュラスが生まれて17日後のことである。両親の噂が密かに流れているフランス人社会の閉塞感をデュラスが敏感に感じ取りながら成長し、そこにアンヌ＝マリ＝ストレットルの存在が重ねられてい

た可能性もあるのではないだろうか。

### おわりに

本研究では、デュラスの自伝的作品のなかでほとんど描かれぬ父親アンリ・ドナデューの足跡を追って、彼の公文書を収集し分析した。デュラスの両親、とくに父親に関しては、作者の父親に対する記憶の乏しさゆえ自伝的作品のなかでほとんど描かれていないため研究されてこなかった。しかし、今回の研究調査で確認した資料からは、父親の死が長い間不確かなものとして家族のなかで漂っていたこと、デュラスの両親の結婚が祝福のうちになされたものではないことがわかった。自伝的作品における父親の死や、噂がすぐに広まる植民地のフランス人居留区の閉鎖性がある意味作者の実体験としてデュラスの作品に反映されていた。

当然ながら史実と物語を比べて論じることは難しいが、それでも父親の存在がデュラスの文学作品に痕跡を残していないわけではない。父親の地理的・身体的不在ゆえに過大な父親像が自伝的作品では重要であった。とくに母親にとって、夫は植民地での夢を結実させた存在だった。そのため彼の喪失は母親に大きいのしかかった。母親の願望が過大な父親像を構成し、彼女の語りを通して子供たちに父親のイメージは受け継がれていった。母親が語る父親の死の絶望と死を予知した感嘆のイメージは、そのまま子供たちへと引き継がれることになる。デュラスは父親を書けなかったのではなく、書かないことにより、作品全体に彼の不在を横たわらせたのではないだろうか。

\*本研究はJSPS 科研費 17K18170 (研究代表者、河野美奈子) による研究成果の一部である。

### 注

- 1) Jean Vallier, *C'était Marguerite Duras, Tome I 1914-1945*, (2006), *Tome II 1946-1996* (2010), Paris, Fayard. アンリの経歴に関しては、同書を主に参照した。
- 2) 1922年8月2日付の植民地省からアンリの弟ロジェ宛の文章。(未刊行、筆者がArchives nationales d'outre-mer (以下ANOM. で統一) にて確認)
- 3) 1923年2月23日インドシナ総督府から植民地省への通達。寡婦年金受給のための必要書類記載。(未刊行、筆者がANOM. にて確認)
- 4) 1926年5月30日付の書類。マリ・ドナデューから植民地省へ。(未刊行、

筆者が ANOM. にて確認)

- 5) Jean Vallier, *Tome I 1914-1945*, pp. 215-216.
- 6) 12月30日付の植民地省の書類。(未刊行, 筆者が ANOM. にて確認)
- 7) Marguerite Duras, *Un barrage contre le Pacifique*, O.C. t.I, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2011, p. 288. 同書からの訳は次の邦訳を参照しつつ拙訳を用いた. マルグリット・デュラス『太平洋の防波堤』, 田中倫郎訳, 集英社文庫, 1979年, p. 15.
- 8) Marguerite Duras, *L'Amant*, O.C. t. III, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2014, pp. 1461-1462. 同書からの訳は次の既訳を用いた. マルグリット・デュラス『愛人』, 清水徹訳, 河出書房新社, 1985年, pp. 23-24.
- 9) *Ibid*, *L'Amant*, p. 1472. 同書からの訳は次の邦訳を参照しつつ拙訳を用いた. (前掲書, pp. 51-52.)
- 10) Marguerite Duras, *L'Amant de la Chine du Nord*, O.C. t. IV, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2014, p. 607. 同書からの訳は次の既訳を用いた. マルグリット・デュラス『北の愛人』, 清水徹訳, 河出書房新社, 1996年, pp. 37-38.
- 11) Jean Vallier, *Tome I 1914-1945*, p. 86. 同書ではこの手紙が植民地省大臣に送られた日付は1914年8月となっていたが, 実際には1914年4月21日となっていた. (筆者が ANOM. にて確認)
- 12) 1914年4月21日匿名の手紙. 植民地省大臣宛て. (未刊行, 筆者が ANOM. にて確認)